

2013年度
関西学院大学ロースクール

B日程

一般入試（法学未修者）
特別入試

論文問題

《9:50～12:20》

○開始の指示があるまで内容を見てはいけません。

【論文問題】

【問題文】をよく読んで、以下の問題に答えなさい。

問題1 都市の本質的要素として2点あげるとすれば何か。「1 ～こと。2 ～こと。」との形式で要約しなさい(各30字以内)。なおその際、キーワードに下線を引くこと。

問題2 【問題文】中の下線部の都市型コミュニティの「垂直的な排他性」とは何か、なぜ都市型コミュニティはそのような性質を有するのかに触れつつ説明しなさい。なお、農村型コミュニティとの対比と、都市型コミュニティが持つ「垂直的な排他性」が現代日本社会において持ちうる積極的な意義について必ず触れること(600字以内)。

問題3 現代日本社会における都市型コミュニティの再生と非営利団体(NPO)の役割について、筆者の見解をふまえつつあなたの意見を述べなさい(1000字程度)。

但し、下記【事例】について具体的事実や発言をあげて(引用する際には【事例】中の記号を用いてよい)例証として用いること。

【事例】

「特定非営利活動法人(NPO法人)親子遊び場センター」(以下センターという)は、東京都のM市N町に住む女性Aがリーダーとなって8年前に結成された。

法人の目的は、①自然の中で子どもを育てる『のびのび教育』、②孤立しがちな親同士が学習しながら、協働して、子どもとともに自らも成長する『共育』、③親子と地域の人とのつながりを活性化していく『地縁教育』とされている。

会員資格の制限はなく、目的に賛同する人は誰でも加入することができるため、M市の外から通ってくるメンバーも多い。ただし、会員となった場合は、会費の支払義務だけでなく、会員として組織運営(イベント等の準備、運営方針を決定する会議への参加など)に責任をもって関わるのが課されている。会の意思決定は、会員全員から構成される総会(法律用語では社員総会という)で多数決で民主的に決定される。

活動内容は、平日はA:専属スタッフが学齢期前の子どもを預かって行う保育と、B:週末に行われる親子共同での遊びや地域交流を中心としたイベント、C:定期的に行われる子育てについての親向けの学習会である。

活動場所はM市N町に昔からある神社内にある地域住民のための共同施設を間借りしており、日頃の外遊びは緑豊かで広々とした神社の鎮守の森で行われている。神社と地域自治会がこのセンターの活動趣旨に賛同し、協力しているためである。

地域の老人会のメンバーは、特に孫らが保育されていなくても、伝統の遊びの伝承や地域に伝わる昔話の語りなどに随時参加している。他方で、神社境内やN町町内の大掃除にセンター会員親子が参加するほか、センター主催の行事(運動会など)に参加する地域住民も増えており、相互交流が活発化している。

センターを利用している会員からは、次のような声が寄せられている。

- (ア) 「田舎出身で、親の援助も得られず、夫は毎日深夜帰宅の中、孤独でうつになりかかっていました。センターに通い始めて、多くの子育て仲間やたくさんの子どもを育てたという近所のおばあさんたちとつながりができました。学びながら、安心して、子育てを楽しむことができるようになりました。」
- (イ) 「最初は利用者なのに、なぜ組織運営にまで関与しなければならないか、疑問と不満だらけでした。でも今では、自分たちの組織としてお互い助け合うためには、皆が運営に参加をするのは当然だと思えるようになりました。」
- (ウ) 「以前は、鎮守の森のことを薄気味悪い場所と思っていました。今では、孫子の代まで子どもたちがのびのび遊べる貴重な自然を守っていききたいと心から思います。」

他方で地域の住民からも、次のような声が寄せられた。

- (エ) 「センターのおかげで、娘や孫みたいな知り合いが増えて、都会では珍しく道で会っても声をかけるようになった。自分の孫でもないのに、顔も名前もわかる子たちに遊びを教えたりして、生き甲斐ができた。毎年運動会を楽しみにしている。」
- (オ) 「地域のお年寄りについて誰がどこにいるのかなかなかわからなかった。ところがセンターを通して神社に集まる機会が増えて、お年寄りの情報が集まるようになり、行政と一緒に、近所の一人暮らしのお年寄りに声かけすることも始めている。子供たちは地域の接着剤だと思う。」
- (カ) 「マンションが増えて昔の面影が失われたこの町で、私たちの先祖の時代から変わらないのが鎮守の森。こんな大都会の中でふるさとを思い出させる貴重な場所で、子どもたちが育っていることを誇りに思う。」

【問題文】

農村型コミュニティと都市型コミュニティ——「つながり」のあり方

「農村型コミュニティ」とは、“共同体に一体化する（ないし吸収される）個人”ともいべき関係のあり方を指し、それぞれの個人が、ある種の情緒的（ないし非言語的な）つながりの感覚をベースに、一定の「同質性」ということを前提として、凝集度の強い形で結びつくような関係性をいう。これに対し「都市型コミュニティ」とは“独立した個人と個人をつながり”ともいべき関係のあり方を指し、個人の独立性が強く、またそのつながりのあり方は共通の規範やルールに基づくもので、言語による部分の比重が大きく、個人間の一定の異質性を前提とするものである。これらの点を、関連する論点とともにやや単純化して対比したのが表1である。

表1 コミュニティの形成原理の二つのタイプ

	(A) 農村型コミュニティ	(B) 都市型コミュニティ
特質	「同心円を広げてつながる」	「独立した個人としてつながる」
内容	「共同体的な一体意識」	「個人をベースとする公共意識」
性格	情緒的（&非言語的）	規範的（&言語的）
関連概念	文化（注1） 「共同性」 母性原理	文明 「公共性」 父性原理
ソーシャル・ キャピタル（注2）	結合型（bonding） （集団の内部における同質的な結びつき）	橋渡し型（bridging） （異なる集団間の異質な人の結びつき）

（注1）「文化 culture」は農村（ないし農耕 cultivate）と、「文明 civilization」は都市（city ないし civitas）と対応するが、ここでの趣旨は、前者は「複数の共同体に完結するもの」、後者は「複数の共同体が出会うところに生成する（普遍的な）もの」といった意味である。ちなみに culture の語源はラテン語の動詞 colere（耕す）で、その原義は「世話をする」であり（伊東 1985 参照）、「ケア」と重なる。この論点は本書の中でさらに展開したい。

（注2）「ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）」は人と人との関係性（慣習、規範、ネットワーク等）に関する用語で、様々な議論の系譜があったが特に近年において社会学分野で広く使われるようになったのはアメリカの政治学者パットナムの著作を通じてである（パットナム「2000」、内閣府国民生活局編「2003」）。

（注3）「コミュニティ」という言葉や概念について、この表での（A）のみを「農村型コミュニティ」とし、（B）は含まない場合もあり、それは意味の完結の問題であるが、ここでは（農村型コミュニティ、都市型コミュニティという具合に）両者を合わせて「コミュニティ」という言葉・概念を使う。

こうした「農村型コミュニティ」と「都市型コミュニティ」という対比を行った場合、日本社会（ないし日本人）において圧倒的に強いのが前者（農村型コミュニティ）のような関係性のあり方であることは、あらためて指摘するまでもないかもしれない。（中略）戦後の日本社会とは“農村から都市への人口大移動”の歴史といえるが、農村から都市に移った人々は、カインシャと核家族という“都市の中の農村（ムラ社会）”を作っていたといえる。そこではカインシャや家族といったものが“閉じた集団”になり、それを超えたつながりはきわめて希薄になっていった。そしてさらに、そうしたムラ社会の「単位」が個人にまでいわば“縮小”し、人と人との間の孤立度が極限まで高まっているのが現在の日

本社会ではないだろうか。

実際、以前にもふれた点だが（広井[2006]）、2005年に出されたOECD（経済協力開発機構）の報告書では、（中略）国際的に見て日本はもっとも「社会的孤立」度の高い国であるとされている。この場合「社会的孤立」とは、家族以外の者との交流やつながりがどのくらいあるかという点に関わるもので、日本社会は、“自分の属するコミュニティないし集団の「ソト」の人との交流が少ない”という点において先進諸国の中で際立っている。

現在の日本の状況は、「空気」といった言葉がよく使われることにも示されるように、集団の内部では過剰なほど周りに気を遣ったり同調的な行動が求められる一方、一步その集団を離れると誰も助けてくれる人がいないといった、「ウチとソト」との落差が大きな社会になっている。このことが、人々のストレスと不安を高め、冒頭でふれた高い自殺率といったことも含めて、生きづらさや閉塞感の根本的な背景になっているのではないだろうか。

したがって、日本社会における根本的な課題は、「個人と個人がつながる」ような、「都市型のコミュニティ」ないし関係性というものをいかに作っていけるか、という点に集約される。これについては、ひとつには「規範」のあり方（集団を超えた普遍的な規範原理の必要性）という点が大きな課題となり、またもっと日常的なレベルでのちょっとした行動パターン（挨拶、お礼の言葉、見知らぬ者どうしのコミュニケーション等）ということが同時に重要となると考えられ、またアジアなど外国人との関わりの増加も契機のひとつになりうるかと思われる。

（中略）

「市民」という概念

都市の“外延”を画する城壁に象徴されるように、ヨーロッパ（や中国）などにおける都市では、都市とその外部（農村）との境界がきわめて明瞭であり、言い換えれば、日本と違って、都市というものがひとつの実質的な「まとまり」をもっているという感じが強いということを述べた。そして、実は「市民」という概念もこの点と不可分のものなのである。

私たちは、「市民 citizen」という言葉を言葉としては知っているし、それはメディアなどでもある程度普通に使われる用語になっているが、しかしなおこの言葉は、その実質的な内実を伴って日本社会に定着しているとはいえないように思われる。かくいう私自身も、この「citizen」という言葉の実質的な意味が、自分の中で納得のいく形で把握できているとは思っていなかった。

しかしながら、以上のような「城壁」、そしてそこでの「都市—農村」の区別や“「都市」の外延”の空間的な明確性、ひいてはそこから生まれる“まとまった実体としての「都市」”、さらにそこでの「(都市)コミュニティ」という関係性のあり方ということを考えてときに、私の中で「市民 citizen」という言葉あるいは概念が、非常に“腑に落ちる”形で明確な意味の内実をもって立ち現れることになった。後であらためて吟味するが、市民とはその意味ではある種の「資格」であり——それは一定の(言語化された)権利・義務を伴う——、メンバーシップと呼べるものである。そして「都市」が(城壁を通じて)その外延や外部をもつように、「市民」も本来的にその“外部”——「市民でない者」の存在——をもっている。

ここで、そうした「市民」との関係も含めて「都市」という概念の意味について議論しておこう。

従来から様々な系譜の都市論があり、ここでそれらの全体を概括することは本書の目的でもないし、かつ私の能力を超えるものだが、本章のここまでの議論の内容とも深く関わり、かつ「都市」ということの意味を考える基本的な手がかりを与えてくれるものとして、マックス・ウェーバーの都市論がある(ウェーバー[1964])。

ウェーバーは、その都市論において、すべての都市に共通しているのは「一つのまとまった定住——一つの『集落』」とりわけ一定以上の規模の「大集落」であり、かつそこで「財貨の交換」が行われること、つまり「市場の存在」であるとす。しかし以上だけでは都市の一面を見たに過ぎず、その政治的・行政的側面までを視野に入れると、「都市」というものは次のような存在として把握されなければならないと述べる。すなわち、

「都市は何らかの範囲の自律権をもった団体、特別の政治的・行政的制度を備えた『ゲマインデ』(引用者注：共同体とほぼ同義)として考察されなければならない」

ということであり、この理解を踏まえた上で、ウェーバーはさらに次のように言う。

「アジアの諸都市には、自律的な行政や、とりわけ——これが最も重要な点であるが——都市の団体的性格と、農民と区別された都市民という概念とが、知られていなかったか、あるいは萌芽的に知られていたにすぎない。」(強調原著者)

「中国においても印度においても、ギルドその他の職業団体は、明確な諸権限をもっていたし、あるいは少なくとも官吏たちは事実上これらの団体と諒解をつけざるをえない事情にあった。…(中略)…これに反して、通常は、都市市民のゲマインデそれ自体を代表しうるとき・何らかの共同の団体〔例えば特に都市参事会〕は、存在していない。なかんずく、都市の市民の特殊身分制的な資格が欠如している。このような身分制的資格は、中国や日本や印度には全く存在しておらず、近東アジアにおい

てのみその萌芽が見られるにすぎない。」（同）

（中略）

ウェーバーの都市論は1920年代に初形が公表されたものであり、その事実関係の把握においても、またある種の“ヨーロッパ中心主義的な”理解の枠組みやバイアスという点においても、様々な面で距離を置いて見るべきものであるが、しかしその点をおいてなお、私たちが「都市」というものを考えるにあたっての基礎的かつ重要な視点を提供していると思われる。

ちなみに、先ほど言及した「城壁」についてもウェーバーは言及しており、「日本においては、それは原則として存在しなかった」、「逆に、中国では、すべての都市が巨大な城壁で囲まれていた」とした上で、「通常は、東洋の都市にも古典古代＝地中海的都市にも、また普通の中世的都市概念にも、城砦か城壁かが含まれていたのである」という興味深い指摘を行っている。

団体としての都市

ところで、以上のウェーバーの議論に出てくる、都市のもつ「団体」としての性格という点は、若干ぴんとこない面があるかもしれない。この点に関して、やや個人的な事柄に言及させていただくと、私は数年前から横浜市の経営諮問委員会の委員という職を務めているのだが、そこでも時々使われる「都市経営」といった言葉が、自分の中で十分にその意味をつかめていない感じをもっていた。

ところが、あるきっかけで、経済学者の岩井克人がその著書の中で述べている次のような議論を思い出し、その関連で「都市経営」そして「団体としての都市」という言葉の意味が実質を伴って理解できるようになったのである。

すなわち、岩井は「法人」という概念の歴史的起源を考察する中で、法人という概念が最初に制度化されたのはローマ時代であり、しかも法人という概念を最初に採用したのは、資本主義とは直接関係がない「自治都市」や植民地だったという。そうした点を踏まえた上で、岩井は次のように述べる。

「都市自治体とは、英語でいうと municipal corporation あるいは city corporation です。ということは、それは、ほんとうは、自治会社あるいは都市会社と訳すべきものであったのです。いや、言葉の上だけではなく、実際の仕組みとしても、自治都市は現在の株式会社とよく似ています。市民は株主に対応していますし、市の行政機構は会社の経営組織に対応していますし、市長さんは会社の代表取締役の役割をはたしていまし

た。」(岩井[2003])

若干話題を広げることになるが、岩井はこうした把握を踏まえた上で、今後の展望として「21世紀とは、NPOの活動、とくにNPO法人の活動がますます活発になっていく世紀である」とし、その根拠として、それはある種の「先祖返り」に他ならず、なぜなら「法人の起源は、ローマ時代や中世における都市や僧院や大学といった、まさに現代の言葉でいえばNPOであったのです」という印象深い議論を展開している。

話を「都市」に戻すと、以上のように考えれば「(都市)自治体」といった言葉が、私たちが通常使うのとはかなり異なる、意味の強さをもって立ち上がることになる。つまり「自治体」というと、現在の日本語ではどちらかという(市役所などの)「行政」(組織)を指すものとして使われることが多いが、それは本来そうではなく、そこに住む市民全体を含んだ「団体」なのである。

そうすると、岩井が述べるように市民は“株主”に対応するともいえるが、見方を変えれば、市民は、その人が住んでいる「〇〇市」という団体(コーポレーション→法人、会社)の“社員”ともいえるかもしれない。そこからさらに議論をふくらませれば、本書の中で論じてきたように、戦後の日本社会において人々は「カイシャ」と「家族」というコミュニティ(ムラ社会)への帰属意識を強くもちつつ高度成長期を生きてきたわけだが、「地域」というコミュニティの存在が重要になっていくこれからの時代においては、やや妙な表現かもしれないが、いわば住んでいる市や街あるいは地域を一種の「カイシャ」(=コーポレーションとしての都市)と見立てて、そこへの帰属意識や“愛着”をこれまでよりも強くもつと同時に、それがよりよい姿になっていくように積極的に参加していく、というイメージを考えることもできるだろう。そして若干の希望的観測をこめて言うならば、案外そうした方向が、かつてウェーバーが論じた「団体としての都市」そして「市民」意識ということ、(中略)現代的な形で実現することにもつながるかもしれない。

(中略)

市民あるいは都市の排他性？

先ほど論じたのは「団体」としての都市という論点に関するものだが、もうひとつ、「市民」という概念の吟味が残っている。

ここで、先ほどの「城壁」に関する議論を思い出してみよう。そのポイントは「都市」は(城壁に象徴されるような)ある種の“外延”あるいは“外部との境界”をもっており、その内部にいる成員が「市民 citizen」ということなのだった。そして、城壁に象徴される“外部との境界”の存在が、その内部のメンバーたる市民の間の「コミュニティ」意識

を支える要因のひとつになっているということだった。

ここで、自ずとひとつの根本的な疑問が生まれる。それは、そのように「都市」もまた、「外部との境界」をもっているのだとすれば——言い換えると無限に「開かれた」存在ではないのだとしたら——、それは「ウチーソト」を明確に区分し、閉鎖的な性格をもつとして議論してきた「農村型コミュニティ」（ムラ社会）と最終的には変わらないのはいか、という疑問である。

これは、人と人との関係性あるいは社会構造というテーマを考えていくにあたっての、もっとも根本にある主題のひとつと私は考えているが、それについて言えることは、結論から述べれば次の二点である。

- (1) 「都市型コミュニティ」も「農村型コミュニティ」も、無際限に「開かれた」ものではなく、その“外部”をもっている。しかしながら、いわばその境界線の引き方、言い換えれば成員の間の「つながりの原理」において両者は異なる。
- (2) 「都市型コミュニティ」と「農村型コミュニティ」は、それぞれが長所・短所（あるいは強さと限界）をもっており、両者はある意味で補完的であって、最終的にはその両方が重要である。

このうち(1)については、プロローグでの表1における(A) (=農村型コミュニティ)と(B) (=都市型コミュニティ)の対比がある意味ではすべてを示している。つまり、農村型コミュニティの場合は、人と人とを結びつけるのは、「共同体的な一体感」であり、そのつながりは(一体感という言葉そのものが示しているように)情緒的、かつ非言語的な性格のものである(そのひとつの原型は母子関係に求められるだろう)。若干注釈を行えば、こうした「共同体的な一体感」というものは、“場の共有”ということ、つまり同じ職場で毎日働いているとか、同じ村に住んで生活を営んでいるといった空間の共有性が典型的なものだが、しかしそれに限らず、たとえば「同じ母校の出身者」とか「同じ日本人」といった、(ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』の議論に通ずるような)意識の上での共同性を含むものである。究極的には、それは「地球共同体」、「グローバル・ヴィレッジ」といった地球レベルにまで拡大しうるものである。

これに対し、「都市型コミュニティ」の場合は、その「つながり」の原理をなすのはもっと言語的・規範的なものであり、「個人をベースとする公共意識」と呼びうるものがその実質をなす。この場合、そこではある種の“普遍的なルール”ないし“原理・原則(基本的理念)”というものが人と人とのつながりを支えており、逆にいえば、そうしたルールないし基本理念への賛同あるいは遵守を示せば、その限りにおいてそれは誰に対しても「開かれた」ものなのである。先ほど「市民」とは資格あるいはメンバーシップであり、無際限に開かれたものではないという議論を行ったが、それはこうした意味においてであ

る。

そしてさらにいえば、いま述べた「ルールないし基本理念への賛同あるいは遵守を示せば、その限りにおいて」という点は、実はある種の能力主義的な排他性あるいは差別を潜在的に含んでいるといえるだろう（たとえば文字を読めない者、ある理念の意味を理解しない者は排除されるといった形で）。「都市 city」の原理と「文明 civilization ないし civilized」が重なるひとつの場面がこうした点であろうし、歴史的な脈においては、それはまた「農民」に対する差別ないし抑圧ということとも表裏の関係にある。ましてや、人間以外の動物など、「自然」は（少なくとも原理的には）「都市」に対する対立物であり、「市民」概念は“人間中心主義”と表裏の関係にある。つまるところ、農村型コミュニティが「水平的な排他性」をもつとすれば、都市型コミュニティは「垂直的な排他性」を（少なくとも潜在的には）もつといえるのである。

ちなみに先ほど日本社会における「ウチーソト」意識に関して引用した中根千枝は、人間の社会集団は、究極的には「資格」と「場」という二つの異なる原理によって構成されるとし、地球上に存在する様々な社会は、集団構成の第一条件が、それを構成する個人の「資格」の共通性にあるものと、「場」の共有によるものとの区分できるという議論を行っている（ここでの「資格」とは通常用法より広い意味のもので、個人の一定の能力や資質をあらわすもの）。そして、日本人の集団意識は「場」（の共有）による部分が非常に大きいという点で際立った特徴を有するとする（中根[1967]）。他方、ここで議論している「市民」とは、まさに中根のいう「資格」ということと重なっている。

ところで、以上の「農村型コミュニティ」と「都市型コミュニティ」の対比は、いわば理念的に純化したものであり、現実の歴史においては、これらがその濃淡を変えながら複合する形で生成してきたというべきだろう。たとえば、ここで論じてきたヨーロッパの都市の「城壁」とそこにおける「市民」は、いま述べた「都市型コミュニティ」に概ね重なるものとさしあたりいえようが、その“外部との境界線引きや排他性”には、実はたとえば何らかの民族的・文化的な共同性ないし同質性がある程度働いており、純粋に「開かれた」ものではないといったことも指摘できるだろう。また、その「つながり」が純粋に理念的な次元のものであれば、そもそも「城壁」というマテリアルな境界線は不要ともいえる。

この論点は、先ほど指摘した(2)と関係してくる。つまり「都市型コミュニティ」と「農村型コミュニティ」という二つのつながりの原理は、相互に補完的なものであり、最終的にはその両者（のバランス）が重要であるという把握である。

つまり、「都市型コミュニティ」というものは、「開放性」という点においては長所をもっているが、その結びつきを支えているのは規範的・理念的なルールや原理であり、それ自体において“情緒的な基盤”をもっていない。しかし人間という存在は少なくともそのベースに情緒的あるいは感情的な次元をもっている生き物であるから、何らかの形での

「農村型コミュニティ」的なつながり、つまり共同体的な一体意識をも必要としている。逆にそうした一体意識は、ある意味で強固なものとなりうるが、それは状況の変化に対して不安定であったり、また外部に対して閉鎖的・排他的という側面をもっている。こうした意味で、「農村型コミュニティ」と「都市型コミュニティ」という二つのつながりの原理は、相互に補完的なものといえる。

そしてこの点は、プロローグにおいて人間における「関係の二重性」ということを指摘したことに再び帰着することになる。つまり人間のコミュニティというものは、“重層社会における中間集団”として把握できるものであり、集団の内部的な関係性（＝農村型コミュニティ）と、その外部との関係性（＝都市型コミュニティ）の両方をもつ点に核心があり、その（互いに異質な）両者が人間にとって本質的な重要性をもっているのである。

広井良典著『コミュニティを問いなおす—— つながり・都市・日本社会の未来』（筑摩書房、2009年）から抜粋。なお、注などは略。【問題文】中の下線は出題者。